天文学とプラネタリウム
vol.203
www.tenpla.net

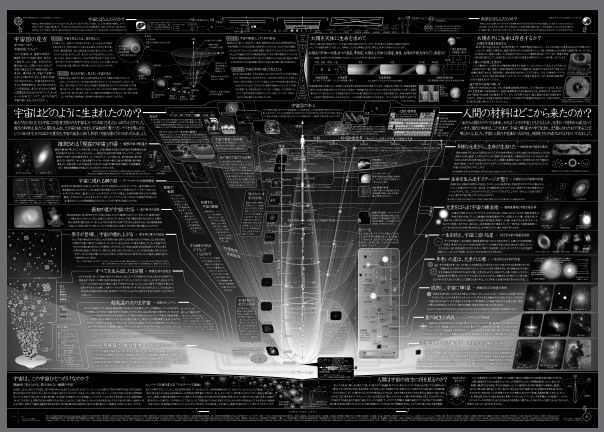
今月のお題

天プラコラムのリニューアル

そもそもこの怪しいコーナーがなんだったのかご存じない方も多いのでは。今回はリニューアルにあたって、少し昔を振り返ってみましょう。

☆ 高梨 直紘（東京大学）／平松 正顕（国立天文台）

記念すべき「天プラ」コラムの第一回。この頃はまだ筆者二人とも修士課程の学生でした。



いろいろなモノ作りもやってます、科学ポスターの宇宙図もそのひとつ。2007年にお目見えしてからバージョンアップを重ねています。

突然ですが、今号から枠を広げて1ページでお送りすることになりました。なぜ急にと思われたあなた、正しい。私たちもそう思っています。でも、きっとこれも天命というもの。中年になった私たちの現在（いま）の姿を、読者の皆さまにはさらによくご覧いただくことといたしましょう。うーん、大丈夫かな。

さて、枠も広がったことですので改めて自己紹介を。このコラムは、天文学普及プロジェクト「天プラ」を立ち上げた高梨直紘と平松正顕の二人で担当しています。ふたりは大学院（天文学専攻）時代の同級生。いまはそれぞれ別の仕事をしながら、天文学の教育や普及にも関わっています。ふたりともちょっと変です。そんな私たちが最近やってることや、関心を持っていることを書き散らしているのがこちらのコラム。執筆は交互に行っているので、それを知らずに読んでいるとこのコラムの主はいったいどういう性格をしているのかと思われることでしょう。違うんです、二人がそれぞれに書いているんです。

この「天プラ」が立ち上がったのは2003年のこと。若い読者の皆さんには想像しづらいかもしれませんが、当時は渋谷にあった五島プラネタリウムや池袋にあったサンシャインプラネタリウム（これは後日リニューアルして、「満天」として復活）などの老舗プラネタリウムの閉館が相次ぎ、プラネタリウム業界の斜陽感が半端ない状況でした。「天」文学を専攻する学生であった私たちが、「プラ」ネタリウムと協力してなにかできることはないか…というところから、「天プラ」と名乗り始めたのが最初です。

そんな訳で、活動の最初のころは各地のプラネタリウム館と連携した活動、例えば大学院生向けのプラネタリウムの見学会とか講演会への講師派遣だとかをやっていました。天文学を学ぶ学生たちの横の繋がりを活かした活動と言えるでしょう。プラネタリウム業界の皆さんにもずいぶん可愛がっていただきました。プラネタリウムでの活動は楽しいですし、お客さんも元々星好きの方が多いので、私たちにとっては幸せな時間だったのですが、ふと、気がつきます。あれ、プラネタリウムは居心地が良すぎるな、と。

元々は、一般市民のプラネタリウムへの関心を高め、足を運ぶ人を増やす一助に天文学を専攻する私たちができることはないか、という話だったはず。そのためにアプローチすべきは、プラネタリウムに足を運んでいる人ではなくて、足を運ばない人なのではないか。その「一般市民」って、具体的にはどんな人たちなんだっけ。そもそも、なんで自分たちは「天文学」を背負った気になっているんだっけ…。

それまで無邪気に「当たり前」と感じていたものが、実はどれひとつとして当たり前でなかったことに気がついたこと。これが私たちにとっての大きな転機でした。かっこよく言えば、アイデンティティを見失ったわけです。これを再構築せねば、なにをやってても苦しくてしょうがない。しかし、いったいなにに頼って作り直せるのか？それを考えた時に、唯一信じられたのが自分の「これが面白い」と思える感覚でした。自分の感覚をもっと成長させ、それをなんらかの形で表現して、周りの人々にも見える場所において、なんらかのフィードバックをもらう。そういうサイクルをぐるぐる回していくことが、天プラの活動スタイルになっていったのでした。

こうなると、もはや「天文学の普及のため」とか、そういうことはどうでもよろしい。いや、立場上それを言わないといけないこともありますが、それは手段であって目的ではない、ということを間違わなければそれで良し。それよりも大事なのは、我面白い故に我在りの境地です。我が在るためには、面白いが必要なわけです。幸い、星ナビのさまざまな記事を読んでも分かるように、宇宙の面白さは当面尽きそうにありません。その面白さを、私たちというちょっと変わったフィルターを通して見ると、どう見えるのか。そんなことを、このコラムではお伝えしていければと思っています。引き続きお付き合いのほど、よろしくお願いします！